

戰場を脱出してピヨベ(メークテラ南東二五キロ)へ向かい転進をした。

翌三日、一〇・三〇ころ戦車二十数両を伴う敵は再び四周から市街地に進入した。吉田部隊の歩兵と山砲は湖西地区になお止まって戦っていたが、日没までに全山砲が破壊され、歩兵第二大隊は壊滅的な損害を受けた。

メークテラは三月三日日没までに完全占領されてしまったが、ペグー付近から救援に駆けつけた第四十九師団主力と、第三十三師団歩兵二百十四連隊基幹の作間支隊は、共に防衛戦に間に合わず、第十五軍司令部が付近に到着したのは翌四日未明だったという。

メークテラ防衛に当たったのは四千名であり、吉田部隊以外は兵站部隊、航空基地隊、通信隊、入院患者、兵站滞留員で部隊の性質上戦闘力に期待はもてなかった。

このようにして、ビルマの助入、第四十九師団狼部隊の歩兵第六十八連隊(吉田部隊)は、十九年五月

編成以来、ビルマ戦線に投入され、急遽、中国雲南省の断作戦に参加し友軍の撤退を助け、二十年二月末、メークテラ救援のため孤軍奮闘し壊滅的な打撃を受けた。その中の一兵士としての後藤廣治さんの、負傷でいざりながら、ビルマ南部、タイまでの奇跡の撤退行であり、戦後五十年にならんとする今日、亡き戦友の慰霊に心を尽くしていることに肝銘するものである。

## 狼第四十九師団防疫給水部

### 末期ビルマ撤退

長崎県 村山 由太郎

―徴集年次は何年です。何処へ入隊されましたか。

昭和七年徴集ですから、明治四十五年七月九日長崎市で生れ、兵隊検査で補充兵でした。昭和十六年七月十六日、輜重兵第五十六連隊に召集されました。例の関特演召集でほとんど大正生れだったと思うが、七月

二十日に釜山上陸、独立自動車第六十二大隊転属となつて朝鮮平壤まで行つた。関特演は対ソ連戦用だつたから、急いで召集、現地へ急行ということのようです。

私は、金網製作をしていたが、その時分は平和産業の民間の業務が出来なくなつて、軍需産業の長崎製鋼所へ入つたが、産業戦士として十一月七日に召集解除になりました。第二回の召集まで、製鋼所へ勤務していました。

— 第二回目の召集は何時でしたか。

また朝鮮でしたか。

昭和十九年六月六日臨時召集（騎兵第八十六連隊）され、門司から出港し、今度は南の方で、八月二十四日台湾基隆着、九月五日高雄出港、九月十八日にマニラへ入港したのですが、そこまではやられなかった。船団を組んでいるが、私の乗った船は船足が遅く、駆逐艦が後になり先になつて、後で思えばよく無事マニラへ着けたと思います。

ところが、入港した翌日、艦載機や爆撃機が、百機

近く来襲し、日本軍の零戦と空中戦をやつた。初めは演習かと思つて見ていたが、本物だつた。

二日目もまた艦載機が来て、港灣がやられ、船は岸壁から離れたが、結局沈められた。兵隊四、五〇〇名は下船していたが、車輛部隊だけは残つた。船には内地米があり、港の外米は不味なので、私は志願して監視に残つたのです。船を岸壁から五〇〇メートルぐらい沖へ出した。その時は五〇機ぐらいの艦載機に攻撃された。空中戦は見事なもので敵機が墜落して来た。我々も急いで武装した。時間は昼頃だったが、船はやられてしまい船底が海の底に着いて、船首の方が海上に出たままだったので、甲板に載んでいた自動車と、濾過器二台は沈まずに済んだ。

私はサロンに戻つたが、爆撃だったので、海に飛び込んで二時間ぐらい泳いでいた。ところが次から次へと空襲されるので、海軍の護衛艇は退避してしまつている。やつとボートが来て、一〇名ぐらいが助けてもらつた。それから以後は危ないの連続だつた。

— 船がやられて、マニラで待機していたのですか。

行先は何処でしたか。

一ヵ月間ほどマニラにいて次の船を待っていた。何処へ行くのか我々下の者は分からなかったが、やっと船が入港した。私たちは「アラビア丸」に乗るといつていたら他の部隊が乗って、我々の部隊は「えいざいまる」に乗った。翌日マニラを出たが、ボルネオ行き「アラビア丸」は、二時間ぐらいで敵潜水艦の魚雷で轟沈した。私はそのときデッキの便所に行っていたが、ドカンという音がしたので海を見たら「アラビア丸」はもう沈没してしまっていた。皆で「アラビア丸」に乗らなくて良かったと言いつたが、運が良かった。我々は船団を組んで出発したが、途中「えいざいまる」だけは別れて、十月二十八日ボルネオ島に入港した。しばらくボルネオにいて、太平漁業の捕鯨船を改装した仮装巡洋艦が護衛に来て、夜出港し、翌日シンガポールに着いた。その時も運良く敵に攻撃されなかった。たしか十一月二十六日でした。

馬來半島に一泊し、夜列車で北上してタイに入った。十二月二日、泰緬国境通過、鉄道は日本軍が作った。

目的地はビルマだったわけですね。第四十九師団防疫給水部というから、朝鮮編成で、ビルマの助部隊だった狼兵团だったわけですね。

そうですが、私等召集兵ですから細かいことは判らずの行動でした。鉄道でビルマに入り、キヤンウタン兵舎に入り休憩し、本隊は先にモールメンに行ったが、残った我々三〇名（防疫給水部の半分）はベグーの先のエニ駅へと出発した。

その後、昭和二十年二月、三根大尉の命令でメーカーラへ出発することになる。防疫給水部の四名はメーカーラを目がけて行ったが、その時はもう自動車は無しで、牛車三台で行った。先に言ったように、自動車はマニラ港で沈められてしまった。給水濾過器二台だけは残ったのだが輸送する車が無いから牛車なのだ。

路は細くて雑草が生えていて刈らなければ車は通れないので、街道を夜十時頃出発した。目的地は長しか判らぬ、我々三名は何処へ行くのか判らない。長は朝鮮出身の兵隊だった。

翌朝八時、焼野原で休む。牛車をそこへ置き、同僚の山口、渡辺を炊さんにやった。その時、何処へ行ったか判らない。私は監視に残っていたら、敵がワンサと来る。戦車がメークテラから来たのではないかと思った。長は帰って来ない、どうもおかしいと思った。

四時頃、飛行機からの攻撃が止まり、焼野原に敵のM型戦車が来た。その時、私一人が攻撃された。部落へ炊さんに行っている二人は敵から見付けられないから攻撃されない。長が西の方から軍服でなくビルマ服を着て蛮刀を振り回しながら来た。「村山、村山」と呼ぶ、私は車の下にいたので、良く見ると長だった。私は長が網傘を被り蛮刀をかざしているので射とうと思った。彼は恐らく変装して逃亡しようとしたのだろう。現地人だったら英軍は射たない。山口、渡辺は部落から炊さんを終え帰って来たが、長はまた脱走してしまった。山口は追いかけてようとしたが、また敵機にやられるので長をあきらめた。しかし、長が逃げたので、何処へ行くか目的地が判らない。よわったことだ三人は相談した。

夕方になって街道に出てみたら、日本の兵隊がゾロゾロ南下して来る。そこで我々は元の所に引き返し車輻を取りに戻り、また街道に出たがもう兵隊は一人もいない。鉄道線と街道との交差している所で、病院の患者が下って来たが、残った者は自爆したのだろう。牛車に患者を乗せてやり、エニまで撤退した。そこに

部隊の一部がいるはずだが、その民家に誰もいない。それから三〇〇メートルぐらい先の河の所に、山口と渡辺を捜しにやったが一時間しても帰って来ないので、私は銃に弾丸を装填していたら二人が帰って来た。報告では誰もいないというので、後の方も捜したが判らない。

翌朝八時頃、ヤダケの森で休んだとたん、空襲だと思った。山口が私を起こす、渡辺は未だ眠っている。そこを出たら、戦車に乗った敵兵から射たれたので逃げたら、他部隊の兵隊も敗残兵と同じで、あわてて出て来た。何人かやられたらしいが、私は後を見ずに逃げた。

南の森で、我々の師団の狼部隊輜重隊の曹長と一緒

になったが、曹長も道を知らない。他部隊の患者も一緒にになり、二〇名ぐらい合同した。曹長は書類も焼き、昼間は敵に見つからぬように隠れて、夜現地人を捕え道を聞いたが教えない。刀で脅かしたら、敵の軍用犬（シェパード）がほえるので兵隊たちは散った。

私たち三人は、また他部隊の人と一緒にだったが、森の出口が判らぬ。夜なので月を見て方向を判断し、曹長が鉄道線路を見付け、手を振ったので皆道路に出て、線路に沿って畑へ出た。

―各部隊はバラバラになって撤退していたのですか、指揮系統はなくなっていたのですか。

各兵団はそれぞれ撤退していったのでしょうか、我々の狼兵団は、撤退援護のために末期にビルマへ投入された助人部隊です。しかも防疫給水部は幾つかに分かれて行動していた。前にも言ったように私等は目的地も知らないで三人で行動した。目的を知っている長が、ビルマ人に変装して我々を置いて何処かへ行ってしまった状況でした。

それに、その時は、追撃する敵と、撤退する日本軍、

しかも、病院の患者や落伍者などが入り混じっていたので、何処の誰だかも判りませんでした。

私たちは、街道と河の間の畑にいたが、東の方で、ゴーゴーと音がしたので何かと思ったら英軍のM型戦車三台が来て、三〇メートル手前で停まった。兵隊が乗っていたが、指揮官らしいのが双眼鏡で見ている。「もう駄目だ」と身動きしないでいたが、幸い戦車はトンゲーの方向へ行ってしまった。

私等は夜を待つて河を渡ってトンゲーへ進み、翌日そこに着いた。曹長が我々の部隊を捜したが、部隊はいない。ところが、私の方が先に撤退していて、結局部隊は後から退って来た。

渡辺も山口も「ケマビユの泰国境へ行こう」と言う。私も仕方なくついて行つたが、行けども行けどもジャングルだった。やっと道路に出て、自動車にあつて同乗させてもらったが、途中で故障した。ラジエターの水が漏れているので、川を見つけて水を入れ、やっと動き出したが、その道路の先はジャングルで行けない。

そこでまた、爆撃され何名かが死んだ。何処の部隊

の人か判らないが、我々三人がいたら我々狼部隊の歩兵将校や患者と会った。我々は単独行動しているので、我々の今までの行動を認めてもらわなければ、逃亡ととられてしまうことも心配だった。そこで、理由を言っつてその指揮下に入るようになった。

それから先も、ジャングル、ジャングルの連続で、その中で飯を炊き、水も見つけて四、五日いた。その後、六月二日と記憶しているけれど、やっと連絡がとれた。

迎えに下士官が来た。三人はこじき同然の姿だった。部隊はタトシ市のゴム林にいた。本隊には、長の松山が先に帰って、我々三人の様子を報告していた。ところが、我々の山口の報告と違うという。松山は、我々を置き去りにして実際は、ビルマ人に変装して逃げたしまったから、相当虚偽の報告をしていたらしい。そのため長の松山は上官に呼び出されて、叩かれたらしい。そのため松山は私をうらんでいた。松山の班長からもうらまれていたらしい。

終戦はヤダチゴム林で聞いた。十一月までムドンで

抑留された。雨期になったので、今度はマンダレーの王城に抑留された。昭和二十二年八月、ランゲーンに出て、八月二十二日、宇品上陸、復員した。

## ビルマの「狼」部隊から 方面軍憲兵へ

長崎県 三宅 一郎

―三宅さんの軍歴を拝見すると、ビルマに行かれ南方軍の憲兵隊で教育を受けられたようですが、昭和何年徴集でしたか。

私は大正十二年一月十六日、長崎生まれですので、昭和十八年徴集で、徴兵検査では第二乙種でした。その時は、パラオの南洋庁の総務課に勤務中で、セレベス経由でジャワへ行くつもりでいたのです。そのため徴兵延期をしないで内地に帰ったのです。

体格も余り良い方ではなかった上に眼鏡をかけておつたため第二乙種で、入営せずということでした。その